航空ファン
KOKU-FAN

ワイドカラー
WIDE COLOUR
ヘンシェル
Hs129



☆特集☆
カラー特集：ルーク空軍基地のF-4C
ソ連の新型戦術戦闘機スホーイSu-19
日本で最初のジェット攻撃機"橘花"

'76 9
SEPTEMBER

BUNRIN-DO JAPAN

$3.30

ジョージ空軍基地のF-105
F-105, GEORGE AFB, Ca.



訓練飛行に向うF-105G。現在アメリカ空軍の中で，F-105Gを装備する実戦部隊は，ジョージ空軍基地の第35戦術戦闘連隊（35thTFW）に所属する，第561，562戦術戦闘飛行隊（561st TFS，562nd TFS）の2飛行隊だけである。

F-105Gs are now assigned to 561st TFS and 562nd TFS of 35th TFW, George AFB, Ca.

(Photo by Frank B. Mormillo)



B. Mormille)



エプロンで整備中の35thTFW所属のF-105F。左はキャノピー下に描かれている部隊のエンブレム。
F-105F of 35th TFW. Left is the unit emblem.

(Photo by Frank B. Mormillo)



Photo by Peter Greve

ルーク空軍基地のF-4C

F-4C, LUKE AFB, Ariz.

アリゾナ州ルーク空軍基地の，第58戦術戦闘訓練連隊（58th TFTW）所属のF-4Cの中には，胴体と主翼上・下面に，空戦時における有視効果を評価するためのストライプを描いている機体がある。上は赤と白のストライプを入れたもの。下は黒と白の機体で，垂直尾翼上端の色分けとシリアルナンバーの書き方から，58th TFTWの司令官機らしい。また空気取入口ベーンには，2個のミグ撃墜マークが描かれている。

F-4C of 58th TFTW, Luke AFB, Ariz. Note the stripes underneath the fuselage and main wing for visibility tests. The plane on the next page is the 58th TFTW Commander's. Two MiG killer marks seen on the air-intake vane.


LA
AF
64777
LA
58TH
G30



(Photo by Peter Greve)

黄色に黒フチ付の有視効果評価用ストライプを描いたF-4C。
F-4C with visibility evaluation stripes.

(Photo by Peter Greve)

アメリカ建国200年記念の塗装をした58th TFTW所属のF-4C(シリアルナンバー63-7676)。写真のように垂直尾翼を青・白・赤で塗り分け、空気取入口ベーンに建国200年記念のマークが入っている。その上にはミグの撃墜マークが描かれている。
F-4C (SN 63-7676) in U.S. Dicentennial marking.



ルーク空軍基地のF-15
F-15, LUKE AFB, Ariz.



ルーク空軍基地の58thTFTWに所属する555TFTSのF-15の中にもF-4Cと同様、有視効果評価用のストライプを描いた機体がある。写真は赤と白のストライプを描いたF-15A。

F-15A of 555th TFTS of 58th TFTS, Luke AFB, with red white visibility test stripes.

(Photo by Peter Greve)



Photo by Peter Cooper

機首と主翼上・下面に黒と白のストライプを描いたTF-15A。
TF-15A with black white stripes on the nose and wing surfaces.

ノースロップF-5
NORTHROP F-5



アリゾナ州ウイリアムズ空軍基地で撮影した、ルーク空軍基地の第58戦術戦闘訓練連隊（58th TFTW）第425戦術戦闘訓練飛行隊（425TFTS）所属のF-5E。
F-5E of 425th TFTW, 58th TFTW, from Luke AFB. Photo taken at Williams AFB, Ariz.

(Photo by Peter Greve)

▷前ページと同じウイリアムズ空軍基地で撮影した，58thTFTW，425thTFTS所属のF-5E。
F-5E of 425th TFTS from Luke AFB. Williams AFB.

▽胴体と主翼に黒と白のストライプを描いた，ルーク空軍基地の58thTFTW所属のF-5B。
F-5B with black/white stripes.



(Photo by Peter [illegible])



(Photo by N. Taylor)



(Photo by N. Taylor)

フェアチャイルドA-10
FAIRCHILD A-10

上はネリス空軍基地におけるA-10A。この機体はドイツに派遣されるための塗装がされている。機体はグレイ2色の迷彩で，注意書きなどはすべて黒で記入されている。下はエドワーズ空軍基地で各種テストに使用されているA-10A。

A-10A at Nellis AFB, in a two-tone gray camouflage. This is to be dispatched to Germany. The other plane is the A-10A in use for various tests at Edwards.





ロッキードF-104
LOCKHEED F-104

△イタリア空軍で使用しているF-104S。F-104S in use by Italian AF.
▽1976年度タイガーミート射撃大会に参加した、カナダ国防軍第439スコードロン所属のCF-104G。
CF-104G of Canadian Defense Force 439 Sq., participated in Tiger Meet '76.

(Photo by Peter Greve)



PANAVIA 200 TORNADO



(Photo by Peter Greve)

パナビア200トーネード

△去る4月30日から5月9日まで開かれた，第11回ハノーバー・エア・ショーで初公開された，パナビア200トーネード。
PANAVIA 200 TORNADO debut, 11th Hannover Air Show, 30 April - 9 May.

▽オランダのトウェンテ空軍基地で行なわれたNATO在中央ヨーロッパ連合軍（AAFCE）の第12回タクティカル・ウエポンズ・ミート に参加した，フランス空軍第13ウイング所属のミラージュ5F。
Mirage 5F of French AF, 12th Tactical Weapons Meet, Twenthe AFB, Netherlands.

フランス空軍のミラージュ5F

MIRAGE 5F IN USE BY FRENCH AF

(Photo by AAPP)



ロールアウトしたYC-14
ROLLED OUT YC-14



米空軍のAMST（次期中型短距離離着陸輸送機）計画のボーイングYC-14の試作1号機が完成し，ワシントン州シアトルのボーイング・フィールドで初公開された。同機は今後，地上で各種テストを行ない，8月から飛行テストを開始する予定。なお試作は2機が予定されている。

The No. 1 experimental YC-14 of the USAF AMST program completed recently at Boeing Seattle plant. Flight tests scheduled for August.



テスト飛行が続く ロックウェル・インターナショナル

B-1 UNDER SEVERE TESTS B-1爆撃機



△完全な攻撃・航法システムを装備して，ミッション遂行能力をテストするためのB-1 2号機は，去る4月1日，モハビ砂漠にでかけて，4時間54分にわたるテストを受けた。写真はテスト実施中，T-38と編隊飛行する2号機。

▽B-1の試作3号機が去る6月14日，エドワーズ空軍基地に到着，これで，エドワーズにおいてテスト中のB-1は3機となった。そして，現在3機のB-1のテスト飛行は，合計188時間以上になっている。写真はエプロンで翼を休めるB-1試作3機。



ミコヤン MiG 23 フロッガー



MIKOYAN MiG FLOGGER



前ページとこのページは，飛行訓練中のソビエト空軍のパイロットとMiG-23フロッガーB。フロッガーBは，写真でわかるように機首に，空中受油装置を取り付け，航続距離が大幅にのばされている。前ページの写真では，胴体下面や主翼，脚などの細部がよくわかる。このページの機体には，主翼下面と胴体下面に，対地攻撃用の爆弾が装備されている。



アメリカ建国200年記念塗装をした

T-2Cバックアイ練習機

U.S. BICENTENNIAL CAMOUFLAGED T-2C BACKEYE

(Photo by Lt. Dave Graham, USN)

アメリカ建国200年記念の塗装をした，アメリカ海軍第26練習飛行隊（VT-26）所属のT-2Cバックアイ練習機。塗装は機体は白で，垂直尾翼の'76は赤，その下の帯は上から赤，白，青の3色，胴体の帯は上から赤，白，ライトブルー，白，黒，白，赤となっていて，機首の文字は紺色になっている。増槽は内側が黒で，外側は細い赤フチ付のライトブルー地に白い星が描かれている。



このページも建国200年記念の塗装をしたT-2C。左は第19練習飛行隊（VT-19）所属機で，胴体は白，機首の塗り分けは紺，白，赤，白，紺。増槽は赤，白，紺に塗り分けられている。垂直尾翼の文字は紺色で書かれている。胴体のNAVYの書体が変っているのもおもしろい。下は前ページと同じ機体。





エアバスA.300

AIRBUS A.300

△オランダのトランサビア航空で使用するエアバス A.300B4。同社では A.300 を今年5月14日から就航させている。

▽最終仕上げ段階の，インデアン・エアラインズ向け A.300B2 1番機。(量産34号機)。同機はこのほど機体塗装を終えたが，8月末に初飛行をおこなったのち，内部ぎ装のためMBBのハンブルグ工場に回航されるが，10月末に引渡される前に，再び最終テストとアクセプタンス・フライトを実施するために，ツルーズにもどってくる。





△ロンドンのヒースロー空港を離陸する，ブリティッシュ・エアウエイズのコンコルド。
▽ハリアーの航続距離，搭載量を倍加する新型を開発するためのテストがまもなくはじめられる，改造は米英共同プログラムとして行なわれ，部隊配備されるのは，1983年と予定されている。アメリカ海兵隊では，現在 110機のハリアーVSTOL機を，イギリスのホーカーシドレー社に発注済みであるが，さらに 340機の追加発注の承認を求めている。写真はホーカー社のテスト飛行場を離陸するハリアー。



DOUGLAS C-117D



(Photo by A. Ohtuki)

第332攻撃飛行隊のA-6E

▽厚木基地に飛来した海兵第332全天候攻撃飛行機（VMA（AW）-332）所属のA-6E。VMA（AW）-332は，6月にそれまで岩国基地に駐留していた海兵第324全天候攻撃飛行隊（VMA（AW）-324）と変ったものだが，部隊が変っただけで機体はそのまま受けついでいる。

ダグラスC-117D

△厚木基地に着陸する，岩国基地に駐留しているC-117D。垂直尾翼に描かれている国旗は，アメリカ建国200年を記念するものである。

(Photo by A. Ohtuki)



A-6E OF VMA(AW) 332



ジョージ空軍基地
George AFB, Calif. USA



Photos by Frank B. Mormillo



カリフォルニア州ジョージ空軍基地にある第35戦術戦闘連隊（35TFW）にはF-105Gワイルドウィーゼルを装備する第561と第562戦術戦闘飛行隊(561TFS、562TFS)が所属しているが、アメリカ空軍の中でF-105Gを使用する実戦部隊はこの2飛行隊だけである。また第563戦術戦闘訓練飛行隊（563TFTS）はF-105GとF-4Cを装備していて、ここでF-105Gの訓練を受けたパイロットは561、562TFSに配属される。このページと右ページはF-105G。




GA


GA
GA
AF
63 343



563TFTSでF-4Cの訓練を受けたパイロットは67TFS（PACAF—太平洋空軍）や81TFS（USAFE—極東空軍）に配属される。また21TFTSはF-4C／D／Eの戦闘乗員の訓練を行っている。そのほか431TFTSは、有事の際に世界中どこにでもF-4と乗員を配備できる機能をもつ部隊で、そうした時態にそなえる訓練を主として行っている。このページと右ページは、上記の部隊で使用されているF-4だが、このページ下の563TFTS所属のF-4Cには、機首の赤外線センサーに小さなふくらみが増設されている。




GA


GA
368


GA
761



ジョージ基地の20ＴＦＴＳはドイツ空軍パイロットの訓練を行っていて、これにはこのページの写真のようにドイツ空軍所属（米軍マークを付けているが機体はドイツ迷彩）のＦ-４Ｆを使用している。また20ＴＦＴＳにはＦ-４の上級操縦者コースがあり、これはアメリカ空軍のＦ-４インストラクターを養成するもので—必要があればホロマン空軍基地の434ＴＦＷにパイロットを提供できる仕組みになっている。





ネリス空軍基地

Nellis AFB, Nev. USA

Photos by Frank B. Mormillo





ネバダ州のネリス空軍基地には、戦術戦闘機武器センターがあり、現用の第一線機を装備した第57戦闘機武器連隊（57ＦＷＷ）がそのテストを実施して戦技や武器の開発を行っている。前ページとこのページ下および右ページ下は57ＦＷＷ所属のＦ-111Ｅ。上と右ページの上と中はマウンテンホーム空軍基地から訓練に飛来した第366戦術戦闘連隊（366ＴＦＷ）所属のＦ-111Ｆ。






MO


NA



離陸する57ＦＷＷ所属のF-4E。右ページ上も同じ57ＦＷＷのF-4Eだが、主翼下に空対地ミサイルAGM-65マベリックを装備している。



ネリス基地には、インディアン・スプリング空軍補助施設というのがあり、ここは射撃場として使用されているため、年中他基地の航空機も飛来して射撃訓練やテストを行っている。写真のRF-4Cはここに来て訓練中のものだが、RF-4Cが胴体下面に爆弾ラックやロケット弾ポッドなどを装備しているのは非常にめずらしい。







このページ中と下はエグリン基地から訓練に飛来した33TFW所属のF-4E.





基地上空を飛行するF-101B。これは州航空隊から訓練のためネリス基地に飛来したもので，胴体下面に 600ガロン入り増槽を装備している。

これもネリス基地に訓練のため飛来したニューメキシコ州航空隊所属のA-7D。



PHOTO NEWS



アルゼンチンの陸軍航空隊に引渡されたセスナT-41D練習機。



中と下はヨーロッパの共同企業体エアバス・インダストリー所属の、"スーパー・グッピー" 超広胴型輸送機。エアバスA300 の機体主要部分は、フランス、西ドイツ、オランダ、イギリスなどにあるエアバス参加の航空機製造会社でつくられており、この"スーパー・グッピー" で、最終組立工場のあるフランスのツルーズに運ばれる。





上はソ連のバキンスキー地区迎撃隊に配備されているYak-28。左下は訓練飛行を終えたバキンスキー地区迎撃隊のパイロットたち。右下は、飛行機の整備工、工作機械工場の工員など、若者が航空スポーツクラブを組織した。これは単なる趣味ではなく、彼等の目的は陸、海、空軍を支援するための飛行知識と技術を身につけることだという。写真はグライダー・チームの訓練風景。

(TASS)



(TASS)



(TASS)



(TASS)



(TASS)



(TASS)

上と中はMi-6大型ヘリコプターを使用した陸軍の演習風景。下はモスクワでこのほど開かれた第6回青年科学技術振興展に出品された1人乗りスポーツ機。リガのレーニン青年共産党民間航空研究所製作の同機は、時速265km、飛行距離3,200kmの記録を樹立した。



(TASS)

スナップだより



厚木基地に飛来したＶＲ-24所属のＣ-２Ａ。
(Photo by S.Ohtaki)



ＰＳ-１の１号機を改造した消防艇は、５月19日の初飛行以来順調に初飛行を続けている。外形上の違いは、魚雷ポッドとサーチライトがなくなり、ＭＡＤも整形されている。 (Photo by H.Hamano)



パンアメリカン航空が、アメリカと東京間の無着陸線に使用しているボーイング747ＳＰ。
(Photo by Y.Takeuchi)

ワイドカラー
WIDE COLOUR

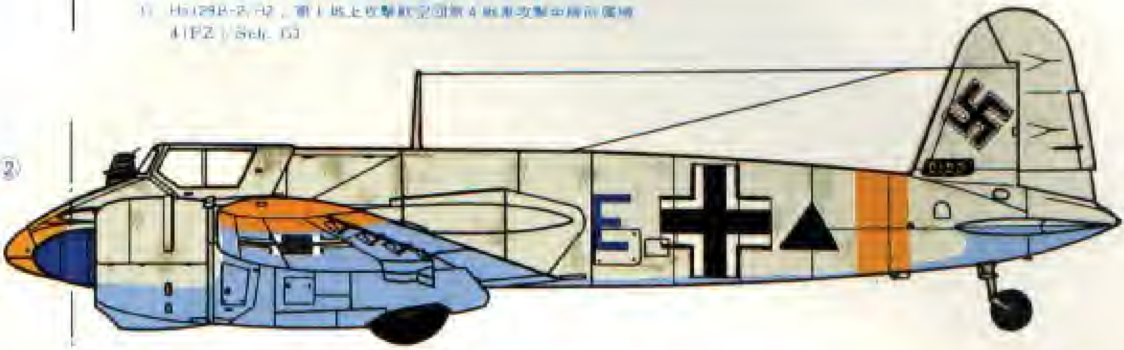
HENSCHEL Hs129

①



① Hs129B-2/R2，第1地上攻撃航空団第4戦車攻撃中隊所属機
4.(PZ)/Sch. G1

②



② Hs129B-1/R2，第1地上攻撃航空団第8中隊所属の冬期迷彩機
8./Sch. G1

③



③ Hs129B-2/R2，第2地上攻撃航空団第4戦車攻撃中隊所属機
4.(PZ)/Sch. G2

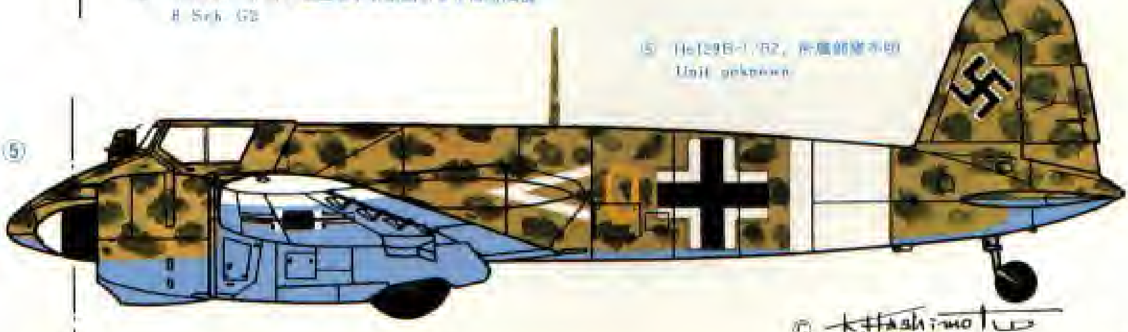
④



④ Hs129B-1，第2地上攻撃航空団第8中隊所属機
8./Sch. G2

⑤ Hs129B-1/R2，所属部隊不明
Unit unknown

⑤



© K.Hashimoto



(⬆ Hs129 tested by USAAF at Freeman Field)

▶ドイツ空軍の戦車狩り専用機◀

ヘンシェル Hs129

Henschel Hs129 Ground-Attack Aircraft





〔⬆ Hs129B-3 with 75mm. Bk7.5 anti-tank Cannon〕

ドイツ空軍が2次大戦に実用化された唯一の地上攻撃専用機Hs129。同機は大戦中に数機が不時着したり，後退したドイツ軍の飛行場に置き去りになって，連合軍側の手に入り，飛行テストが行なわれている。

〔左上〕米軍に運ばれ，フリーマン・フィールドで陸空軍航空隊の手で飛行テストされたHs129Bの1機。尾翼の「FE-4600」は外国評価テスト機記号。同機のフリーマン・フィールドでテスト後の行方は不明である。

〔左下・下〕北アフリカ戦線で連合軍側に不時着してイギリス軍にとらえられたHs129B-1。同方面に派遣されたHs129の二つ目の部隊，第2地上攻撃航空団第4中隊の所属機（4./Sch.G2）の所属機であったものと思われる。同機はろ獲した敵ドイツ機で編成した特殊部隊，第1426飛行小隊に装備されたが，のちに英空軍マークとNF756のシリアルが付けられ，シーランドの第47整備部隊に保存されている。

〔上〕胴体下に75mmのBk7.5対戦車砲を装備したHs129B-3。Bk7.5砲は1分間発射弾数40発。敵戦車の約500mの距離から，1降下で約4発を発射した。

（82ページ本文記事参照）

〔⬇ Captured Hs129B-1 (NF756) during its use by No.1426 Flight〕



北アフリカ戦線のスピットファイア



SPITFIRE MK. 5



サンドフィルターを付けたスピットファイアMk. 5C、1942年6月にエジプトに進出、同年いっぱいスエズ運河防衛などに活躍した第417スコードロンの所属機。写真は同年秋頃の撮影である。

Spitfire Mk5C of No. 417 Squadron, North Africa, Autumn 1942.



KIKKA's on production line at Nakajima's Koizumi plant, Gunma Pref.

●日本で最初のジェット機●

特殊攻撃機“橘花”

わが国で開発した最初のジェット機がこの“橘花”特殊攻撃機。本土に押しよせる敵艦船撃滅用として，大戦末期にあわただしく開発されたが，終戦直前に1号機が初飛行したのみで，ついに戦力にはならなかった。写真上と下は，終戦直後に中島の小泉製作所試作工場（9号棟内）で撮影した完成途上の“橘花”。空襲で天井はアナだらけ。雨が降ると写真のように水たまりができる同工場内には，未完成の“橘花”の胴体がズラリと並んでいた。下の写真の右後方に見えるのは18試陸攻“連山”の主翼と後部胴体。



HURRICANE MK. 2



Hawker Hurricane Mk. 2 in North Africa.

北アフリカ戦線のハリケーンとモスキトー

前ページと同じく北アフリカ戦線に派遣されたホーカー・ハリケーンMk. 2（写真上）とデハビランド・モスキトーMk. 6。モスキトーは，1942年から43年にかけてマルタ島方面に展開，南部イタリア攻撃などに参加した第23スコードロンの所属機。



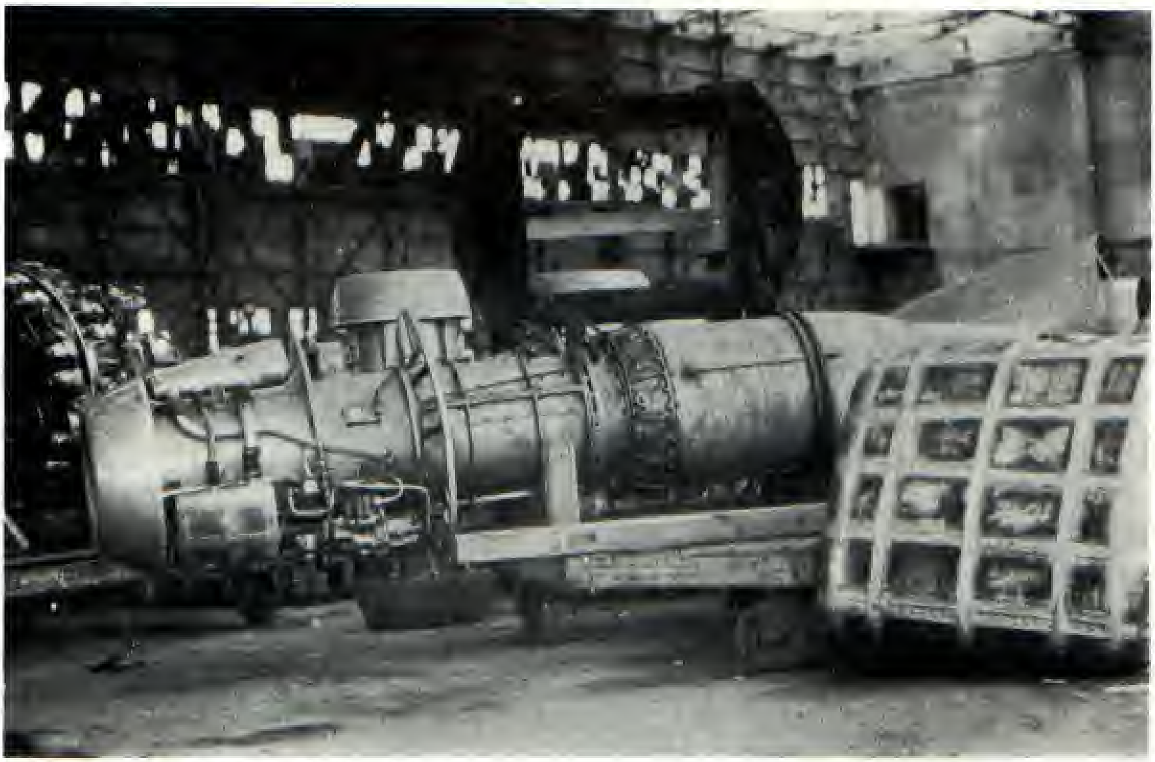
MOSQUITO MK. 6

de Havilland Mosquito Mk. 6 of No. 23 Squadron, Malta 1943



Experimental Special Attacker "Kikka"

これも未完成の"橘花"。当時の資料によると，強度試験機２機をのぞいて，完成したのは１号機のみで，エンジンが積まれて完成間近いのが２－７号機の６機，８－10号機はエンジンなしで降着装置も未完成，このほか胴体と主翼が結合された11－16号機，胴体だけが組上った17－25号機が，この工場に運び込まれて製作に入っていた。

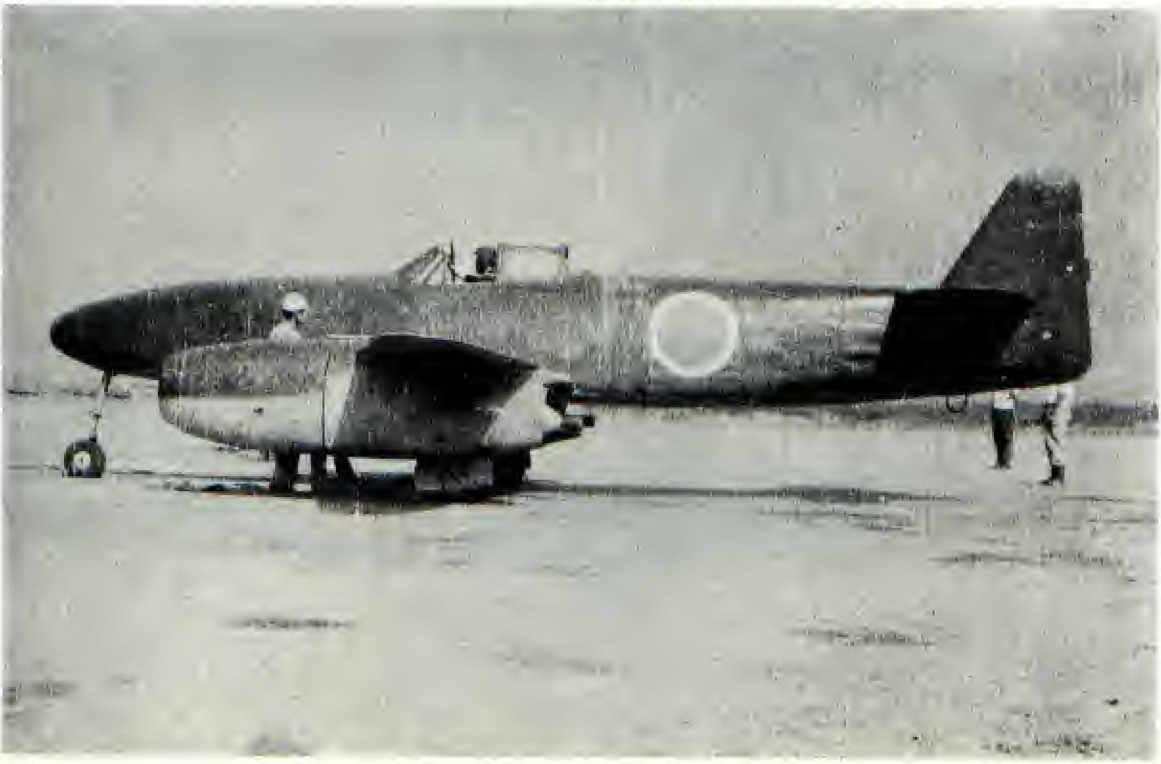


KIKKA's powerplant "Ne 20" turbo-jet engine

写真上は"橘花"の動力となった軸流式8段のネ20ターボジェット・エンジン。同エンジンは地上静止推力475kg/11,000rpmで，"橘花"は主翼下に2基搭載した。"橘花"は当初，同じく空技廠で試作したネ12エンジンを積む予定で設計されたが，ネ12は推力不足で，当時ドイツから潜水艦で運ばれたMe262のBWw.003エンジンの写真などを参考として改設計されたネ20エンジン装備となった。本エンジンのほかに，左右主翼付根に推力400kgの離陸促進用のロケット(RATO)も装備した。

写真下は試験飛行のために木更津基地に運ばれた"橘花"1号機。同機は昭和20年7月21日に地上滑走テストを行なったが，8月10日の2回目の飛行で，離陸途中に事故が発生して海中に突っ込んで大破，そのまま8月15日の終戦を迎えることになった。写真は初飛行スタート直前のスナップで，操縦席内は高岡迪操縦士。

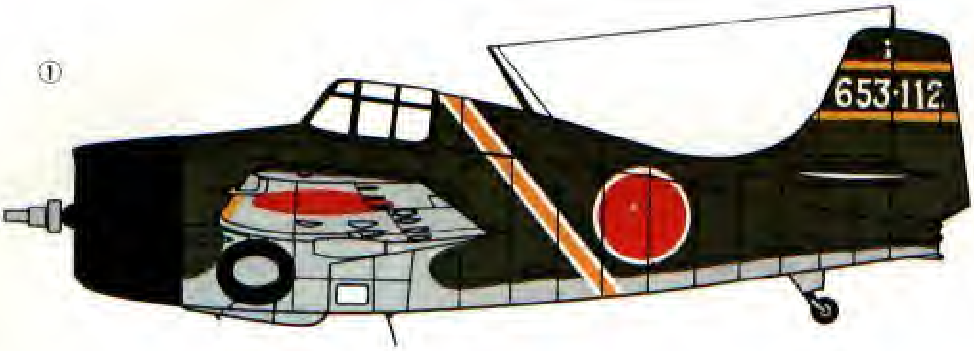
KIKKA No.1 plane arrived at Kisarazu NS for a maiden flight



レベル・キット
1/32スケール・シリーズ

ドリーム・マーキング集

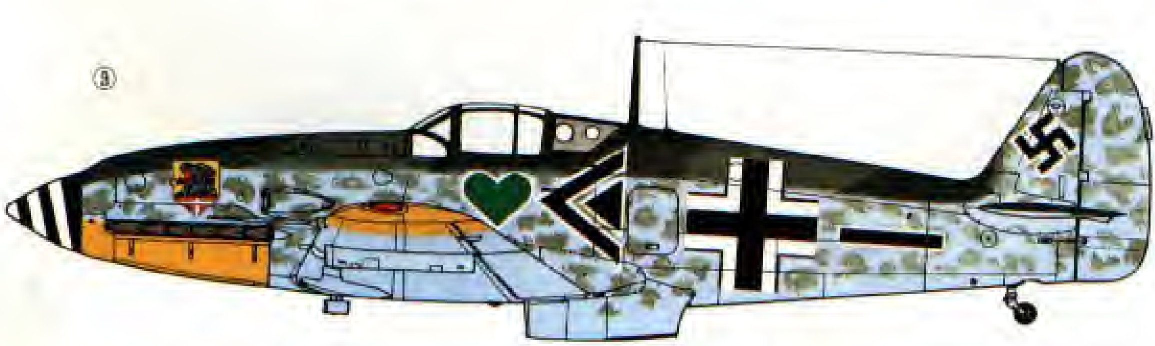
①



②



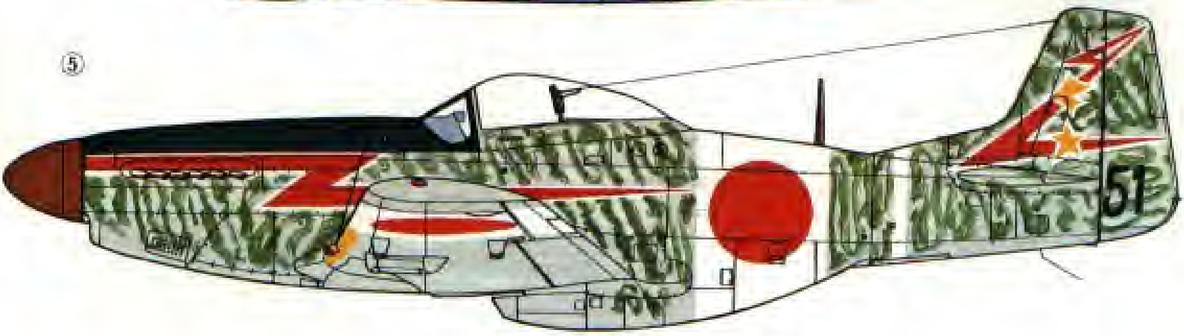
③



④



⑤



⑥



REVELL 1/32 SCALE KIT

DREAM MARKING FIGHTERS



ハイモデリングのための
レベル資料集

名作戦闘機
ドリームマーキング集

輸出向け機とか，ろ獲機などでは製造国以外の国籍マーク付きの機体は珍らしくないが，ここでは実在しなかった国籍マーク付きの有名戦闘機を作ってみよう，というドリーム・マーキング集を企画してみた。日常見なれたスタイルの機体が，カムフラージュとマーキングが異るだけで，どれだけイメージが変るかというお遊びである。こんな楽しみかた，「ワカルカナァ，ワカンネェダローナァ」

［前ページ図］

① グラマンF4F-4ワイルドキャットを旧日本海軍第653航空隊の使用機にすると，ごらんのようなイメージになるという例。機体デザインに，やはりバタくささがあってピッタリというマーキングにはならないようである。

② 実際にメッサーシュミットBf109は我が国に輸入され，日の丸付きでテストされたのであるが，実戦部隊に配属された場合のマーキングを考えてみるのも楽しいものである。案外日の丸付きのBf109も日本機的なムードにまとまります。

③ Bf109のコピーといわれたキ61-I飛燕のドイツ版。ハインケルHe100にも似たスタイルは，ドイツ式カムフラージュとマーキングが意外にピッタリとまとまる。

④ スプリンター・タイプのドイツ迷彩に仕上った“雷電”。この機体はドイツ機よりアメリカ・マークのマーキングのほうがいいような機体のようである。

⑤ 第２次大戦中の戦闘機として，もっとも多くの他国籍マークをつけた機体が，このムスタングともいえるが，残念ながら日の丸付きのムスタングは存在しなかった。首都防衛に活躍した第244飛行戦隊のマーク付き

⑥ 米艦載機として零戦を採用すると「こうなる」という例で，３色迷彩のU.S.S.バンカーヒルCV-17所属のゼロ・ファイターである。



各国空軍のマークを付けた零戦。
← 中国空軍のマークを付けた零戦21型。後方はカーチスP-40。
↑ イギリス空軍のマークを付けた零戦21型。
→ オーストラリア空軍のマークを付けた零戦52型。
↓ アメリカ空軍マークの零戦52型。







米海軍のチャイナレイク基地に保存されているF4U-4コルセア。エンジン始動中のダイナミックなシーン。(Photo by O. Graham)

ヘンシェル Hs129

ドイツ空軍の
戦車狩り専用機

HENSCHEL HS 129



Hs129Bの先行量産型であるHs129B-0の1機



ドイツ空軍が2次大戦中に実用化させたただひとつの地上攻撃専用機がこのHs129で、防弾鋼板でかためてまるでカブトをかぶったような機首とよろいをまとったように角ばっていかつい胴体が特徴。デビュー当時は馬力不足で運動性がにぶく、おまけにパイロットの視界きわめて不良と、老練なルフトバッフェのテストパイロットもさじをなげる扱いにくさで、その短所は終生本機につきまとったが、のちには大口径の砲を積んだ戦車狩り専用機として、連合軍とくにソ連の戦車部隊を悩ませた。

〔下〕3機の原型Hs129V1～3につづいて1939年から40年にかけて造られた先行量産型のHs129A-0の1機。A-0は倒立V型12気筒のアーガスAs410空冷エンジン装備で、のちの機体とはナセルの形状が異なっている。操縦席は6～12mmの防弾鋼板でおおわれ、狭い透明部も75mmの防弾ガラス。両脇にエンジン・ナセルが張り出し、視界はたしかに悪かった。







Ｈｓ129Ａ-０は８機が造られ、1940年秋には地上攻撃の実用訓練部隊に引渡されてテストされたが、操縦席からの視界不良に加えて、空中での運動性の悪さは原型と変らず、生産型のＨｓ129Ａ-１計画はキャンセルされた。ヘンシェル社では、再設計したＰ.76案を出したが、実用化の遅れをけねんする空軍当局では同案を採用せず、Ｈｓ129Ａ-０のエンジンをフランスからろ獲したノーム・ローヌ14M４／５星型空冷エンジンに換装する改善策を命じた。［左上・上］ノーム・ローヌ14M４／５に換装したＨｓ129Ｂの先行量産型Ｈｓ129Ｂ-０。Ｂ-０は10機発注され、１号機は1941年12月に空軍側に引渡された。Ｂ-２ではエンジンを換装したほか、操縦席の透明風防部分を広くして問題の視界を改良、電動のトリム・タブをつけて舵の重さを改善するなど、Ａ-０よりはいくらか扱いやすいものとなった。［下］北アフリカのトリポリに派遣されたＨｓ129Ｂ-１。





先行量産型のＨｓ129Ｂ－０は1941年末から42年３月にかけて完成、つづいて生産型のＨｓ129Ｂ－１もつぎつぎにロールアウトした。同年４月なかばには、早くも本機による最初の部隊である第１地上攻撃航空団第４中隊（4.／Sch.G１）が編成され、５月には東部戦線に送られた。しかし実戦部隊に投入してみると、ノーム・ローヌ14Mエンジンは意外と信頼性にとぼしく、わずかの損傷でも不調となって、可動率はふるわなかった。そのため本機による二つ目の部隊、第２地上攻撃航空団第４中隊（4.／Sch.G２）が編成されたのは５ヵ月後の９月になってからであった。4.／Sch.G２は、12機のＨｓ129Ｂ－１を装備して10月10日に北アフリカ戦線に派遣されたが、空輸の途中で４機が脱落、ぶじ到着した８機も半数は戦力とならなかった。ノーム・ローヌ14Mはとくに塵埃や砂に弱く、急きょ装備されたサンドフィルターもさして効果がなく、北アフリカ戦線の4.／Sch.G２は、ほとんど戦果をあげることなく1943年初めに南イタリアに後退した。［上］北アフリカ戦線に派遣されたＨｓ129Ｂ－１、4.／Sch.G１所属機と思われる。前ページ下のＨｓ129Ｂ－１は、4.／Sch.Gにつづいて1943年２月に北アフリカに送られた第２地上攻撃航空団第８中隊（8.／Sch.G２）の所属機。Ｂ－１ではエンジン・ナセル前下方の気化器吸気口が円形のものから四角なものに改造されているが、前ページ上のＢ－０と比較するとその違いがよくわかる。





Ｈｓ129Ｂ－１は機首の固定武装である20ｍｍのＭＧ151×２，7.9ｍｍのＭＧ17×２のほかに地上攻撃機として主翼外翼下および胴体下のラックに110-1b（約50kg）のＳＣ50爆弾やＳＤ２人員殺傷爆弾などを装備したが，増強されたソ連戦車部隊の攻撃機として改造されたのがつぎのＨｓ129Ｂ－２，爆弾架ははずして完全なガン・キャリアとなり，固定武装のＭＧ17も13ｍｍのＭＧ131に換装された。（左下・右上）胴体下に30ｍｍのＭk103機関砲を装備したＨｓ129Ｂ－２／Ｒ２。（下）同じくＲ２の操縦席部分のクローズアップ。防弾鋼板を背負った狭い操縦席。すぐ前方に取りつけられているのはレビＣ12／Ｃ照準器。







このページと次ページは、ソ連軍戦車部隊撃滅のために東部戦線に送られたHs129-2／R2。すべて胴体下に30mmのMk103機関砲を装備しているが，同砲はカバーをかけたのとむき出しのものがあるのに注意。東部戦線のHs129B-2／R2の活躍では、スターリングラード敗北後の戦勢ばん回のために、1943年6月5日に発令された"とりで作戦"（オペレーション・シタデル）に呼応して出動した、ブルノ・メイヤー大尉が指揮する各機の奮戦が有名である。6月8日早朝、森のなかを移動するソ連戦車部隊を発見した同大尉指揮下の第2地上攻撃航空団第4中隊（4.／Sch.G2）、同第8中隊（8.／Sch.G2）、第1地上攻撃航空団第4中隊（4.／Sch.G1）、同第8中隊（8／Sch.G1）のHs129B-2／R2は、ソ連戦車の装甲の薄い側・後面をねらって間断なき攻撃をくり返して全滅させた。この作戦中にソ連軍は1,300両の装甲車輌、1,100両の戦車を失なったが，その大部分はHs129B-2の働きによるものであった。








S

未発表 海軍機写真集



Model 21 Zero Fighter (A6M2) based at Rabaul. The "A Ⅱ" tail marking shows it belongs to Carrier SHOKAKU Fighter Group of the 1st Koku Sentai. To support the Japanese advance force withdrawing from Guadalcanal, Solomon Is., the group advanced to Rabaul, New Britain and Buin, Bougainville, in January 1943.

上と同じく発進準備中の零戦21型。瑞鶴戦闘機隊の零戦は、このとき36機がラバウルに派遣され、撤退部隊を空から支援した
(Photo by F.Hino)



ZERO FIGHTERS AT RABAUL ラバウル基地の零戦部隊



ラバウル基地に進出した零戦21型。尾翼の記号（AII）から，1航戦の2番艦に編入されていた瑞鶴戦闘機隊所属機と思われる。同戦闘機隊は昭和18年1月，ガダルカナル撤退作戦支援のためにトラック島に進出，ラバウル，ブイン基地に展開したが，写真はそのころのものであろう。
(Photo by F.Hino)

Model 21 Zero Fighter (A6M2), one of 36 SHOKAKU Fighter Group advanced to Rabaul.





上と下の写真も、ガ島撤退作戦支援のためにラバウルに派遣された零戦21型。上は発進準備中、下はつぎつぎにエンジンをまわしてスタート直前のもの。ラバウルからガ島の空までは、零戦にして初めて可能な長距離の進出。胴体下に増槽をつるして連日出動、優勢な米航空部隊を相手に奮戦した。　(Photo by F.Hino)



(Up) Model 21 (A6M2). (Bottom) Also the same model Zero. A long distance sortie from Rabaul to Guadalcanal required the auxiliary fuel tank placed under the fuselage.







写真上も昭和18年1月ころにラバウル基地に駐留していた零戦21型の1機。緊急発進で離陸、主脚を引込めようとするところ。空にあがった零戦のシルエットは、どの角度から見ても"機能美"満点のすばらしさである。
〔Photo by F.Hino〕

A Model 21 Zero, took off in scramble, created a mechanically beautiful form in silhouette, January 1943, at Rabaul.

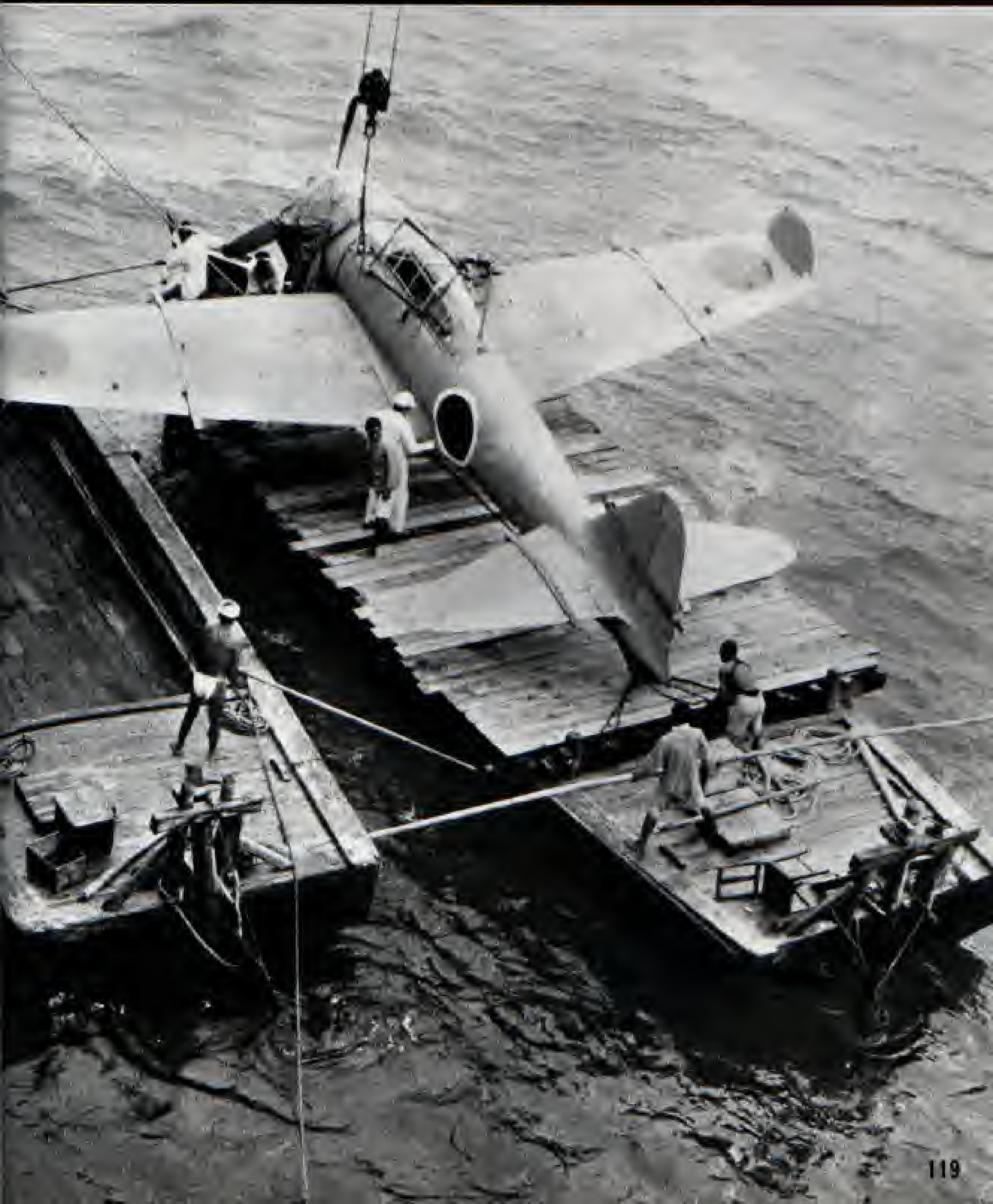
輸送船に積込まれる零戦21型



写真下は、マーシャル群島のクェゼリン基地からナウルへ輸送のため、輸送船へ積み込み中の零戦21型。昭和18年1月の撮影である。アシの長い零戦の移動はほとんど空輸が主体により、輸送船による輸送は珍らしい。エンジンにカバーをかけ、主・尾翼には動翼を押えるために綱帯をあてて、翼端は母艦収納時の状態に折り曲げている。ふだん見られない零戦の上面がよくわかって興味ぶかい。

(Photo by F.Hino)

Model 21 Zero Fighters being shipped aboard a transport. From Kwajalein atoll, Marshall Is. to Nauru, Gilbert Is., these Zero fighters were transported by a transport, Jan. 1943. They looked like nesting birds with their wingtips folded. Rare photo.





上の2枚の写真も輸送船に積み込まれる零戦21型。はしけで接舷してデリックで吊り上げて積載。近代的な戦闘機とはしけの組合わせも妙。忙中閑というか、まことにのんびりとした“輸送作戦”である。上右の写真ではほぼ積載位置に運ばれ、このままおろしたところに固縛して輸送するのである。 (Photo by F.Hino)

⬆ A "half-wit" combination of the sampan and the modern fighters makes us feel that it must have been a "short break" for these birds of fate.

➡ A Type 99 Carrier Bomber, with two 60kg bombs suspended under the wing, is ready to take off from a Rabaul base. The propeller spinner shows that it is the Model 21 later version.

写真右はラバウル基地に派遣された99式艦上爆撃機。プロペラ・スピナのキャップを付けた後期の11型である。主翼下に60kg爆弾を装備して離陸発進するところ。
(Photo by F.Hino)







ラバウル基地の99艦爆





前ページ下と同じくラバウル基地を離陸する99艦爆11型。胴体下に250kg爆弾を1発装備している。後方の掩体にも99艦爆が収納されている。　(Photo by F.Hino)

Type 99 Carrier Bomber carrying a 250kg bomb underneath the fuselage ready to start for a mission. Rabaul. Seen in the backward revetment are also the same model aircraft.



エアラインの翼

Pan Am's Planes

パン・アメリカン航空 ⑤

1930年秋に南米のブエノスアイレスに路線をのばしたパンナムは、地元の小さな航空会社を吸収して、南米の空を席巻した。このころ同地方の路線運航用に、パンナムがシコルスキに特注したのが写真上のS-40と写真下のS-41。6月号に紹介したS-38の流れをくむ双ブーム、双尾翼の飛行艇で、"クリッパーズ"の名で親しまれた大型快速飛行艇のさきがけとなった機体である。記号の番号が示すように、写真上のS-40は下のS-41よりも開発着手は早かったが、S-40はS-38やS-41級の約3倍の大型飛行艇。パンナムに納入されたのはS-41が先で、1931年からボストン-ハリファックス間に就航している。S-41はS-38をスマートにしてやや大型化した水陸両用機で、乗客収容数は11人。つづいて納入されたS-40飛行艇は乗員6人で、乗客は40人を乗せることができた。この両機は南米の東海岸を主にその後4年間にわたって就役。つづいて出現した名飛行艇シコルスキS-42にバトンタッチすることになる。

〔S-40データ〕エンジンP&Wホーネット(2,300hp)×4、全幅34.75m、全長23.47m、全備重量15,694kg、乗客数40名、巡航速度160km/h、巡航高度1,220m、航続距離1,287km。〔S-41データ〕エンジンP&Wホーネット(1,150hp)×2、全幅24.07m、全長13.72m、全備重量6,260kg、乗客数11名、巡航速度169km/h、巡航高度609m、航続距離644km。



North American FJ-4 Fury



ジェット戦闘機の先輩たち

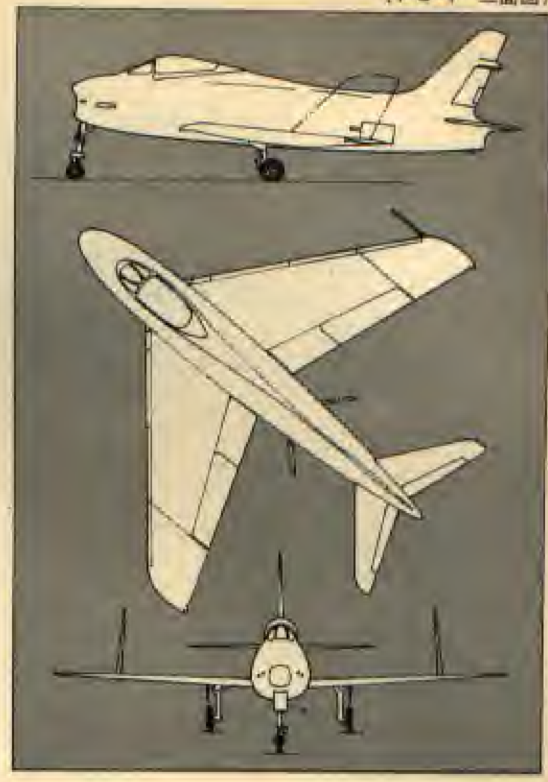
ノースアメリカン FJ-4 フュリイ

アメリカ海軍 ⑩

ＦＪ-3につづくフュリイの最終生産型がＦＪ-4で、-3にくらべると航続距離をのばすために胴体の燃料タンクを約50％増大し、主翼も再設計して後縁中央部にエルロン、内側に高揚力フラップの付いた翼厚比の薄いものとなっている。原型１号機は1954年10月28日にノ社のコロンバス工場で初飛行。２機の原型を含めて全部で152が生産されている。生産型ではエンジンは7,700-lb(3,493kg)のＪ65-W-16Ａとなり、武装は前型と同じく20mm機関砲４門、そのほか主翼下の４つのパイロンにサイドワインダーＡＡＭを装備した。ＦＪ-4はＦＪ-2と同じく、全機が海兵隊の戦闘機部隊に装備され、1957年3月までに全機が納入されている。主翼下のパイロンを６つにふやした戦闘攻撃型が1956年末から生産に入ったＦＪ-4Ｂで、1958年５月までに、222機が生産され、海軍の９個戦闘攻撃飛行隊および海兵隊の３個戦闘攻撃飛行隊が本機で編成された。



（ＦＪ-4　三面図）



左上写真はＦＪ-1(左)とＦＪ-2の編隊飛行。時を追ってスマートになる機体外形。初期のジェット戦闘機の機体形状の変せんがわかって面白い。写真下は海軍部隊でテストされるＦＪ-4。





［左上］ 主翼の6つのパイロンにロケット弾ポッドをつるして飛ぶＦＪ-4Ｂ。地上攻撃任務ではこのポッドにＡＳＭ-Ｎ-7ブルパップ・ミサイル5発のほか、戦術核兵器(ＬＡＢ)も装備した。［下］エンジン始動中のＦＪ-4。ハワイ駐留の第232海兵戦闘飛行隊（ＶＭＦ-232）に装備された1機。1958年1月27日の撮影。［右上］台車に





のせたノイズ・サプレーサ(消音装置)の前でエンジンをテストするＦＪ-4Ｂ。写真下と同じくハワイのカネオヘ・ベイに駐留する第212海兵戦闘飛行隊(ＶＭＦ-212)の所属機で、1959年６月の撮影。Ｆ-4Ｂになると、もうすっかり近代的なジェット戦闘機というプロフィルである。



〔ＦＪ-4データ〕　エンジン・ライトＪ65-W-16Ａターボジェット(3,493kg)×１、全幅11.90m、全長11.01m、全高4.24m、翼面積31.49m²、自重5,990kg、全備重量10,750kg、最大速度1,094km/h(海面上)、巡航速度859km/h、上昇率2,334m/分、実用上昇限度14,264m、航続距離3,250km、固定武装20mm機関砲×４、主翼下パイロンに爆弾計3,000-lb(1,360kg)またはAIM-9Ａサイドワインダー１×４。